

Kappa Novels



お願い

この本をお読みになつて、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッペの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

鉄道ミステリー傑作選 下り“はつかり”

昭和50年6月25日 初版発行

編 者 あゆ 鮎 かわ 川 てつ 哲 や 也
神奈川県鎌倉市極楽寺2-15-11
発行者 小 保 方 宇 三 郎
印刷者 盛 照 雄
東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽 2 株式会社 光 文 社
振替東京 115347 電話 東京 (942)2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(関川製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Tetuya Ayukawa 1975

(分)0-2-93(製)02271(出)2271 (0)

Printed in Japan



178370

日文 701746373

鉄道ミステリー傑作選

くだ
下り"はつきり"

あゆかわてつや
鮎川哲也編



カッパ・ノベルス

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

解 説

鮎川 哲也あゆかわ てつや

エラリー・クイーンの『短編探偵小説——その百年史』（田中純蔵氏訳）によると、「鉄道短編小説二十五選」というタイトルで、犯罪物、冒険物を含めたアンソロジーが、一九〇九年にニューズ社より出版されている。この社からは他にも探偵本がでているので、ミステリーに関心を持つ出版社だったのかもしれないといった程度の想像はつくのだが、このアンソロジーの内容については何一つわからない。が、それはともかく、さらに六〇年が経過した今日のアメリカでは、鉄道推理小説もかなりの数にのぼっていることだろう。

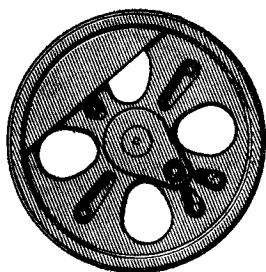
ひるがえってわが国の鉄道短編に目を向けると、残念ながら、戦前戦後をつうじて三十編あるかないかの寥々たるものでしかない。作家の絶対数が少ないせいであろうか、それとも鉄道に関心を持つ作家が多くないせいであろうか。しかし数こそ少ないが、そこには本格物あり変格物あり、SFのショートショートまであるという多様性が見られる。そのバラエティに富んだ面では、よその国に比べて決してひけをとるものでない。わたしはそう考えて自賛するのだ

けれど、これが編者の己惚れであるかどうかの判断は、本書を読まれた賢明な読者諸氏におまかせしたいと思う。

なお、文中頻繁にあらわれる旧「寶石」というのは、岩谷書店（のちに宝石社）から発行されていた推理小説専門誌のことで、現在光文社から出ている「宝石」とは別の雑誌である。混同を避けるために前者を旧「寶石」と呼ぶことが慣行化されており、本書もそれに従った。

鉄道ミステリー傑作選

下り“はつきり”



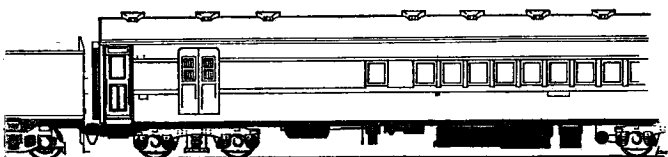
「鉄道ミステリー傑作選」

目次

下り終電車	飛行する死人	電気機関車殺人事件	探偵小説	とむらい機関車	人を喰った機関車	押絵と旅する男	ジャマイカ氏の実験
-------	--------	-----------	------	---------	----------	---------	-----------

坪田 宏	青池 研吉	芝山 倉平	横溝 正史	大阪 圭吉	岩藤 雪夫	江戸川 乱歩	城 昌幸
------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	------

181	137	111	81	58	46	22	9
-----	-----	-----	----	----	----	----	---



夜行列車

沼垂ぬつたりの女

笑う男

下りはつかり

最終列車

泥棒と超特急

浜名湖東方15キロの地点

二十秒の盲点

各編解説

土屋つちや隆夫たかお

角田つのだ喜久雄きくお

多岐川たきがわ恭きよう

鮎川あゆかわ哲也てつや

加納かのう一朗いちろう

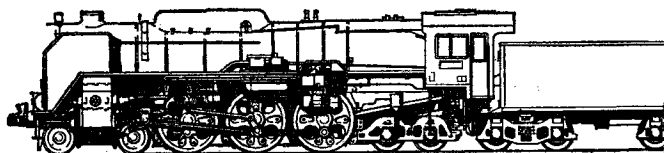
星ほし新一しんいち

森村もりむら誠一せいいち

斎藤さいとう栄さかえ

鮎川 哲也

330 307 301 287 268 247 233 219



本文のカット
柴又 健

地図作成
アトリエ 不忘

ジャマイカ氏の实验

——或る人類空中遊行に就いての一考察——

人は不可能事以外のことを企望するな——

ルミ・ド・ゲウルモン

人が、しみじみと孤独を思ふ晩秋の、とある日を、散りばう病葉の影にしてあわれ秋や逝にけんと、感傷の頭をめぐらす、うすら冷たい日のひねもすを、あやしげなる商賈の群れに伍して、若干の利を争うに疲れた私が、たまたま一郊外電車のプラットフォームに寒々と肩をすぼめて、終電車を待っていた。

ところが、その終電車がなかなか来なかった。ちらり、ほらりとそれへ乗ろうという人も多くなく、やはり私と同じように、皆肩をすぼめ、外套のポケットに両手を突っ込んで、そこここと思ひおもいに、小暗く、寒い影に護られて佇んでいた。

いや、ただひとり、そのプラットフォームの端から端を、大股でゆっくり行きつ戻りつする一外国人だけは別だ。外国人は大股で、ゆっくりと行きつ戻りつしていた。そしてまた、その外国人のコトリ、コトリという靴音以外には何の音さえもしない、このプラットフォームの静けさ寒さ……。

……少し風邪気の鼻を、ときどき嚙り上げながら、そして私が、その外人の歩行ぶりを、何ということなく熱心に、プラットフォームの柱の陰から、まるで不可解千万のものをでも見たかのように、凝然と見詰めていたのであった。

思うに、その外人は、何か思案に暮れている様子である。両手はやはり外套のポケットに突っ込み、だがその

城 昌幸

風采は堂々と、そう、ときどきはちょっと立ち止まり、しかし概して規則正しく、時計の振り子のように行きつ戻りつ、単調なその動作を繰り返していたのである。さよう、もしも、終電が、幾世を経ても来なければ彼もまた、ゆく末かけて久しく、それを続けるであろうもしれぬ、と私がこんな杞憂を抱くに足るほど規則正しく、単調に、その動作を飽かず繰り返していたのである。ところで、しかるにその肝心な終電がいつか来ない。心配さえもしない。それで私は、この寒さと一日の疲労のため、しだいに苛立たしくなってきた。

外人はふと立ち止まった。その、世にも規則正しい動作の半ばで。

？ 思案の糸が切れたのであろうか？ ちょっと、彼は立ち止まったままの姿勢で石像のように動かなかった。が、急にくるり、と、それは彼がブラットフォームの突端まで行ったときに、いつもするまわれ右をするかのごとく、（たぶん推測するに、彼は今自分が立ち止まったそこをそのブラットフォームの突端と、立ち止まったために無意識にそうと心得たのであろう）まわれ右の中途で、まわり切らずにふと中止して立ち止まってしまったのである。で観者の意見としてはおそらく彼が、そ

のまわれ右の途中で、はしなくも切れた思案の迷路へ、何らかの糸口を揭示されたものと、認定したのである。

すると、彼は、その半分のまわれ右の姿勢のまま、（これとも思うに、かの外人は、もはや、完全にまわり切ったものだと思得たのであろう）すぐと、先刻からの己れの規則正しい動作を続行すべくそれを実行に移したのであった。すなわち、彼の左足が前へ出、続いて、最も自然的なる約束のもとに、彼の右足がその前方に！

「あ！」

しかしながら、理由なく、ある不可解な気持ちからその外人の動作を細大洩らさず観望していた私は、この刹那、思わずもブラットフォームの柱の陰から上半身をまゐるで泳ぐように乗り出すと、こう、口の中で叫ばざるを得なかったのである。

というのはほかでもない。いままでにもすでにくどいほど精しく説明したように、外人は未だ半分しかまわれ右をしておらぬ。であるから、彼は今必然的に線路の方へ向かって佇立する姿勢であったのだ。がゆえに、彼は今進んだために、当然その線路上に向かって、つまり、ブラットフォームより三尺近くも下方なる線路上の空間へ向かってその針路を、その右足の踏み出しを求めた解

合となる。ということは、実に、取りも直さず、彼が線路上へ転落しなければならぬ、という道理を示すものなのだ。

「危ない！」で私はこの一刹那、要約すれば、あ！危ない！という二言を口裡に発した短時間内において、以上記述したことを見、かつ考え、その外人を無謀なる行動から阻止しようと今思わずも例の柱の陰から、泳ぐような風つきで上半身を乗り出した一瞬間に、実にこの一瞬間に、「この時遅くかの時早く」私のこれほどの憂慮も水泡と帰して、かの外人は、早くもその右足を、プラットフォーム上より線路上の空間へ向かつて踏み出してしまっていたのであった。

!! 落ちる！ 落ちた！

してまたすぐこう反射的に、私が、たぶんその外人が膝頭かどこかを、線路へしたたか打ちつけて、驚き狼狽で、半分はだが気恥ずかしく、その背高い身体を起こす様子を想像しながら、かく叫んだ時、否思わずもかく思い息を呑んだ時、だが、私は、なおもそれに倍して息を呑まなければならぬことを目睹したのであった。

というのはほかでもない。かの外人の動作が私の想像を裏切ったからである。外人が、落ちなかったからであ

る。すなわち、外人はやはり歩んで行ったからである。

どこを？

空間を！

空間を？ それは不可能であらねばならない。奇蹟であらねばならない。しからざれば、われわれの物理学は破産しなければならぬ。

しかも、見よ！

かの外人が、今、悠々と空中を闊歩してゆくではないか！

まったく、私の今までの憂慮が、全部杞憂にとどまってしまったとは！ 誰が思おう。

その場景はあたかも、線路上一面の空間がプラットフォームと化し去ったかの観があった。そして彼は、右側のプラットフォームに向けて歩一歩、あわてず騒がず、大いなる自信に充てるがごとく、しかもやはり何か未だ己れの思案に耽りながら、規則正しい彼の動作を続けてゆくのであった。

空間を歩む！ 空中遊行術！

ああ、何ということ！

茫然と、私は例の柱の陰から、泳ぐような上半身の姿勢でそれを見守っていたのである。

そしてこの、私の驚嘆と怪訝のうちに、めでたく外人は、その空中遊行術を終わって、向こう側のプラットフォームに到達すると、コッソ、と舗石に靴底が音をたてた。

その靴音で、はじめて外人はふと気づいたごとく立ち止まると、ぐるり、四辺を睥睨するかのように見まわした。それで私もまた我に帰り、思わずも、危うく、その見事なる彼の技術に対しては、拍手することが礼儀ではあるまいか、とそれを実行に移そうとしたところであつた。

さて、それから、彼はもう一度前後左右を見まわすと、はてこれは合点がゆかぬわいといった風にちよつと頭を振りながら、今度は例の思案の漫步ではなく、目的地を指す歩行を線路を横切る地上に求め、今までのプラットフォームへと、戻つて来た。

私は、その外人を仰ぎ見た！

彼は仔細に点見するに、一見平凡な、白髪まじりで柔和な、そう、どこか学者肌らしい変屈さがある、童顔の中老の紳士である。

この人が！

素晴らしきかな！ 実に、ここに奇蹟を現代に行なう人がいる！

その時、やっと待ちに待った終電車が入って来た。でも私も外人も車中の人となつた。

車内は、ガランとうそ寒く空いていた。私はその畏敬するに足る外人の前側に座席を占めると、さておもむろに、この散文的なる現代に、童話の愛すべき香気を、亡びたと信ぜられた中世の玄秘の術を、千一夜譚の美しい荒唐無稽さをもたらしした、偉大にして神聖なる人を、さらにまじまじと凝視しはじめたのであつた。

電車は幾つかの小駅を過ぎた。

そして私はその時、そうだ、自分はこの外人に従いて、親しく、この摩訶不思議なる魔法を伝授してもらわねばならぬ、と、固く心に決したのであつた。で、電車が、とつくに、私の下車すべき停車場をも通過したがあえて降りなかつた。

おお、空中遊行術！ この名称の、ま何と豪勢に響くことよ！ 小鳥のように、あの大空を飛び交う小鳥のよう……春をひねもす、片丘に歌い暮らすあの揚雲雀……ひろびろと、のどかに、しかも年若いころの神のごとおおどかに！

やがて、終点を一つ手前の駅まで来た時、その外人は下車した。私がそれに従つたことは言を俟たぬ。

そこは、いわゆる、郊外の田園住宅地として最近、大根畑を地均^{じき}した、洋風建築の多い場所であった。そして、ここでもこうした郊外の常として、降りた時は多人数でも、すぐばらばらになってしまい、私とその外人は唯二人で、未だ片側しか家並^{やなみ}のそろぬ深夜の路を前後になって急いだのであった。

だが全体、私はどう、話のきっかけを付けたものだろう？ 無礼でない方法では？ 私は外人の後を尾けながら、あれでもなし、これでもなし、と考えた。

すると、未だそれに対して名案の浮かばぬ先に、外人はつと、左側の一軒の洋館の前で立ち止まると、扉^{しり}の鍵穴に錠を当てた。入られてしまっはいかん。今は、もはや顧慮する時ではない。私は思い切って口を切った。

「あの、まことに失礼ですが……」

外人は、振り返った。が暗い中に、電燈の光線に描き出された私の姿を見ると、いかにも訝^{いぶ}しそうに、私を見上げ、さて見下ろした。

私は勇敢に続けた。

「実は、その、僕はまだあなたとは一面識もないのですが、その、実は、折り入ってお願ひしたいことがあるのですが……教授していただきたいことが……いかがでし

よう？」

すると、外人は、ますます不思議そうな面持ちになつて言った。

「お願い？ 教えて？ 何を？」

私はそこで、声を大にして叫んだ。

「空中遊行術をです！」

これを聞くと、外人は激しく瞳^{ひとみ}をくるくると回転させて、私を暫時、凝視^{めい}めた後で、またも問い返した。

「？ 何をですって？」

「空中遊行術です！」私は、続けてかく叫んだ。

「空中遊行術？」

と、鸚鵡^{オウム}返しに外人もまた叫んだ。

「さよう、空中遊行術です！」と私は明瞭に言い切った。
「空中遊行術？ だがそれは何ですか！ 私にはいっとう解せませんが？」

と、しかるに、外人は白々しくもこんな答え方をした。

「解せない？ そんなはずはありません。私は見ました。あなたが悠々と空中を遊行なさったのを！」

と、私は駄目を押した。

すると、外人はますます瞳を激しくくると回転させて言った。

「私が？ 私が空中を遊行したのを、ご覧になったんですって？」

「そうです。で私はぜひとも、それをご教授願いたいのです」

そして、私はこう言うと、丁寧に一礼したのである。

「と、とんでもない！ めっそうもない話です。それは何かのまちがいに相違ありません。私はかつて、空中を遊行した経験を持ちません！」

とこう、外人は何故か頑強に否定した。だがそう否定されればされるほど、なおもその奥義を知りたいのが人情である。それに私は、その外人の口裏で、ハハア、この人は、この尊い秘密の術を、余人に知られるのを好まない性なのだな、と覺つて、今度は方面を変えて言った。「いいやいいや、そう、絶対にご心配にならんでもよろしいのです。私は決して、その真言秘密の術を、他人に洩らしたりなどはいたしませんから。で、はなはだ勝手ですが、どうか私にだけそつとご教授願いたい。現に私は、あなたが悠々と空中を歩行されたのを見たのですもの！ さ、おかくしあるな！」

すると、外人はまじまじと、私の顔を近寄って見直してから言った。

「じゃこうしましょう。ひとつ、私が空間を歩いた、というあなたのお話を精しくうけたまわりましょう。で、もしよろしかったら私の部屋まで、お出でくださいませんか。ここではどうも寒くて……」

私は喜んで、彼の申し出を受けた。いよいよ、神秘の扉が私の前に開けられるのだ！

そして数分の後、彼と私とは、よく調えられた客間の、暖炉の前の居心地の具合のよい脇掛椅子に、それぞれ座を占めた。

すると、外人、（両方で名刺を交換したところによれば）ジャマイカと名乗るこの仁は口を切った。

「ではひとつ、ご面倒でも、そのあなたが見たといわれる、私の空中遊行術を、精しくご説明願いましょう。でないと、どうも合点が参りませんでなあ」

そこで私は、さきほど終電を待っている間に見た、彼、ジャマイカ氏の空中遊行を、事実にも則して細大洩らさず物語った。

「……ホホウ、私が、プラットフォーム上から……なるほど……空間を？ ホウ……？」

そして、だが、この私の話が全部終わった時に、彼は途方もなく大きな声で、右手を激しく振りながら叫ぶの

であつた。そして、この物語いっさいを否認したのであつた。

「そいつは信じられん！　とうてい信じられん。この私が空間を濶歩した！　そんなことは、あり得ん！　全然不可能なことだ！」

私はまったく驚いた。が、私もまた、自説を固持して動かなかつた。で、私もまた氏に負けず劣らずの大声で叫んだのである。

「いや本当です。正真正銘事實です。あなたは確かに空間を歩まれたのです。私は見ましたから！　見ましたから！　見たんですからなあ！」

と、氏は暫時うつ向いて癡然と何か考えていたようだったが、首を上げると、こんなことを言つた。

「だとすれば、それは、あなたの、錯覚じゃありませんか？」

「とんでもない」そして、私も断乎^{だんこ}としてかく言い放つた。

「あなたは空間を歩かれたのです！」

ジャマイカ氏は、何故かまた狼狽^{あわ}てて首を下げた。それから幾分低い声で言つた。

「そうですね。では、もしかすると、よござんすか、も

しかするとすよ、私は空中を歩いたのかもしれませんが……あなたの見られたことが、絶対に錯覚ではない、とすれば」

「そうですね」私は意気揚々と答えた。

「また、そうでなくてはなりません！」

「けれども……」

が、かく、ジャマイカ氏は氣の弱そうな口調で続けた。「けれども、しかるに私は、そのことを全然知らんのですよ。少しも、ね。まったくおかしな話ですが……。で思うに、それはこういうことになるのではないでしょうか、つまり、私があの時純粹に空間を大地であると固く思い込んでいたがために、たぶんそのことのみのために歩けた、というんじゃないでしょうか。この、固くそう思う、という信念ですね、こいつは往々不可解の作用を示すものですから。たとえば、東洋には、石を虎^{とら}と思ひ込んで矢を射込む話がありますね。つまりあれですね。でなければ、催眠状態における現象ですね。で、もしかすると、あの時の私は、思案の極、一種の自己催眠に落ちていたんですね。で、まあ、そうした種類の何かによつて、私が空間を歩行した、という訳なのではないでしょうかねえ。まったく不可解ですが、そうとよりしか、